

形式と意味の認知的基盤と通言語的比較対照

坪 井 栄 治 郎

1. 序

形式と意味の対としての「構文 (construction)」の重要性は Goldberg (1995) 以前からも様々な形で強調されてきたもので、現在認知言語学においてその重要性は広く認識されていると言えるが、同じ「構文」という言葉を使っている、子細に見ると個々の研究者によってその具体的な内容は必ずしも同じではない。2003 年の第 8 回国際認知言語学会において Goldberg と Langacker の間で構文概念をめぐるかなり激しいやりとりがあったことはよく知られているが、Jackendoff とともに違和感なく共同研究のできる Goldberg とは違って、Langacker の認知文法 (Cognitive Grammar; 以下 CG と略記) と様々な面で共通点の多い Croft の根源的構文文法 (Radical Construction Grammar; 以下 RCG と略記) の構文概念も Langacker のそれとは異なっているように思われる。言語の基本単位としての構文の重要性を認めるという意味で構文文法と呼ばれうる文法理論にも様々なものがあり、それらの間の違いについてはすでに Croft and Cruse (2004)、Goldberg (2006) や Langacker (2005)、さらには雑誌 *Cognitive Linguistics* 20-1 にも議論があるが、本稿では CG と RCG を特に取り上げて、あまり明示的に言われない相互の異同について考察を行う。¹

2. 構文の形式面について

形式と意味の対としての構文を言語の基本単位と考えることは、その妥当性について様々な観点から議論の対象になりうる理論的な重要性のあることであり、実際、特に自律統語論と対照・対立させる形で、これまで様々な議論されてきた。しかしながら、その「構文」を構成する「形式」と「意味」の具体的な内容は、構文の重要性を言う研究者同士で必ずしも一致しているわけではないように思われる。まず本節では構文を構成する「形式」について CG と RCG の違いを確認し、次節において構文の「意味」面について見ることにする。

2.1. 音声形式 / 文法形式と内容要件

Langacker (2005) は、Goldberg の Construction Grammar や Croft の RCG と自らの CG について以下のように述べている。

All three versions of construction grammar agree that constructions subsume both lexicon and grammar and reduce to form-meaning pairings. Croft (2001: 62) goes further and says that constructions are symbolic. However, this commonality conceals a fundamental point of non-agreement. I say non-agreement instead of disagreement because Goldberg and Croft appear not to even be aware of it, so they can hardly be said to disagree.

This point of non-agreement concerns what is meant by form. In Cognitive Grammar, as is clearly spelled out in all the published formulations, the form in a form-meaning pairing is specifically phonological structure. [...] [C]rucially, it does not include what might be called grammatical form. In both Construction Grammar and Radical Construction grammar [*sic*], the form part of a form-meaning pairing does include grammatical form. Thus Goldberg (1995: 51) speaks of “a pairing between a semantic level and a syntactic level of grammatical functions”. More explicitly, Croft (2001: 62) says that a construction is symbolic by virtue of being “a pairing of a morphosyntactic structure with a semantic structure”. (Langacker 2005: 104-105)

ここでCGの基本的な主張を確認しておく、CGにおいては言語の本質は言語形式で概念を表す象徴化（意味）作用にあるとされ、それはCGにおいて、象徴化（symbolize）関係で結びついている音韻構造と意味構造という必要最小限の道具立てで実現されている。ここで重要なのは、文法を構成する単位である象徴構造が構成される上で意味構造と結びつくのは音韻構造であって、ここでLangackerが“grammatical form”と呼んでいるような、文法的な機能を担うものではない、ことである。

CGは、現実には用いられた象徴構造とそれに内在する音韻構造・意味構造、およびそこからスキーマ抽出やカテゴリー化という、独立にその存在が認められる基本的な認知操作だけによって現実の言語使用から引き出すことのできるものだけを認める。CGにおいて「内容要件（The Content Requirement）」と呼ばれる、文法記述に課されるこの制約は、生成文法などでしばしば設定される空範疇はもちろんのこと、象徴構造に還元されない文法的原素として設定される限り、統語範疇もその設定を許さず、それらによって構成される従来の統語構造のようなものはこれによってCGから排除されることになる。

2.2. 文法範疇のカテゴリー構造

CGと多くの点で共通するRCGにおいても、Croft (2001: Chapters 5-6)で詳述されているように、構文とその構成要素の部分全体関係以外の要素間の様々な統語関係はsymbolic relationに還元されるべき不要なものとしてされている。さらには、[[[the][song]] ⇔ [[DEF][SONG]]]のような、文法範疇に言及する必要のない具体的な語の単純な連語を論述のための例としている文脈では、意味構造に結びつけられるものをCG同様音韻構造とし、さらにはそれを指すのに言語表現の音韻面/意味面を指して用いられるCG独特の“phonological pole”/“semantic pole”という用語を使うことさえある。

In Radical Construction Grammar, the various morphosyntactic properties that are taken to express

syntactic relations in other theories—case marking, agreement, adpositions, word order, contiguity and so on—are interpreted as expressing the symbolic links from the elements in the phonological pole of the construction to their corresponding components in the semantic pole of the construction.

(Croft and Cruse 2004: 286)

しかし文法範疇や文法関係は RCG においては意味的に規定するのは不可能とされ、分布や文法上の振る舞いによって規定されるべき、個別言語の個別構文に依存したものと考えるので、構文において意味構造と対になるのは CG の音韻構造のような具体的な言語形式ではなく、名詞句や動詞といった文法範疇で指定される形態統語的な要素である。Langacker (2005) が RCG との違いを述べる際に言及している Croft (2001: 222) の英語の授与動詞の二重目的語構文の表示を例に取れば、RCG において授与者が受益者に授与物を与えることを表す意味構造が結びつけられるのは、授与動詞の音韻構造ではなく、「NP1 < Verb < NP2 < NP3」のような、相互の語順が指定された文法範疇から成る構造であるが、語順は CG では音韻構造（における音の連鎖順）で、文法範疇は意味構造で、それぞれ捉えられるものであり、音の実体のない順序概念だけの「語順」、意味から切り離された「文法範疇」というような、“directly apprehended content” を欠く抽象物を CG は必要としない。CG においても NP や VP といった文法範疇名称を用いることはあるが、それは CG に多くある独特の用語法による誤解や混乱を避けるための便宜的なものであり、内容要件に従う限り設定されることのないものである。²

名詞や動詞に対する意味的な規定は、「名詞は典型的には具象物を表す」、「動詞は典型的には意図的行為を表す」というような典型例に対するプロトタイプレベルでのものであれば、従来から行われてきた。名詞・動詞・形容詞をその意味・機能と形式上の有標性との相関の観点から規定した Croft (1991) は、そうした試みの最も重要なものの一つであり、それは現在の RCG にも引き継がれている。CG においてもプロトタイプレベルは “conceptual archetypes” として扱われるが、CG が独自のものは、名詞 / 動詞や主語といった基本的で高い通言語の有用性のある文法概念は基本的な認知能力 (basic cognitive abilities) の言語的な表れであって、分布や文法上の振る舞いはそれらの背後にある意味的な基盤の言わば “symptom” にすぎず、言語ごとの様々に多様な慣習化のされ方の中に見失われかねないその共通基盤を認知のあり方・捉え方 (construal) に求めることによって、非典型的な場合も含めてすべての事例に妥当する、普遍的な意味による規定が可能であることを主張する点にある。そうした考え方は、そうすることによって関連する他の様々な現象を統一的に捉える枠組みの見通し³を与えてくれる点からも CG にとって重要なものであるが、それに対して Croft (2001: 104) は、品詞の規定をめぐる CG と RCG の違いを “chiefly a matter of emphasis” としている。

The difference between the cognitive and typological theories of parts of speech is chiefly a matter of emphasis. The cognitive theory emphasizes the uniformity of the semantic construals found over and over again across languages with respect to constructions expressing the propositional act functions. The typological theory focuses on the variation found in the distributional patterns of constructions and lexical classes within and across languages, and the varied topography of the conceptual space

that underlies the typological universals.

(Croft 2001: 104)

そのような認識の理由の 1 つと思われることに、以下の箇所ですべて述べられていることがある。

One question that can be raised about the Cognitive Grammar analysis of grammatical categories is the relationship between the abstract semantic construal definitions and the variation in both formal distribution and semantic polysemy of such categories across languages. [...] But it is not clear that there is any difference between positing a universal semantic category plus language-specific conventionalized construal for specific cases on the one hand, and positing a polysemous category with a semantic prototype and language-specific semantic extensions on the other.

(Croft and Cruse 2004: 280)

ここで述べられているのは、CG の採る “abstract semantic construal definition” によって “universal semantic category” が規定可能だと言っても、そのような construal をどんな conceptual content に適用するかはその意味的な規定自体からは予測不可能なことがあるのだから、であれば、それは prototype はありながらも schematic な規定には当てはまらない extensions を含む polysemous category structure を想定するのと実質的には違わないのではないか、という疑念である。これは上の Croft (2001: 104) の直前の部分と呼応している。

[I]t must be pointed out that the construals of particular concepts is conventionally established for a particular language, and often for particular lexical items. [...] [T]he language-particular categories which linguists prefer to call Noun, Verb, and Adjective are what Lakoff (1987) calls RADIAL CATEGORIES. Radial categories are categories with internal structure, typically a prototype with extensions that are conceptually motivated but linguistically conventional.

(Croft 2001: 104)

ここで Croft は、意味的に規定される普遍的なスキーマであればその適用を受ける形式の分布（範囲）に違いはなく、分布の違いはスキーマが当てはまらない言語ごとの慣習的な extension によることを前提としているように思われるが、個別言語固有の慣習に従ってスキーマが適用されたものもスキーマを満たすものである点に変わりはない。名詞 / 動詞や主語に対する schematic definability を主張する際に CG が意図しているのは、成員のすべてに妥当する共通性がないような radial category ではなく、スキーマによる規定が非典型的な場合にも依然として妥当するものであり、RCG が強調する言語ごとの違いは CG においては各言語において慣習化されている construal の適用の仕方の違いとして記述される。名詞 / 動詞や主語について意味的な規定が可能とする CG の主張が具体的な分析に基づく empirical なものである⁴ 以上、その主張の批判にはその分析を取り上げて具体的に不備を論じる必要があるだろう。

こうした点についての CG と RCG の違いを Croft (2001: 104) が “chiefly a matter of emphasis” と認識する別の理由として、CG において construal の違いとして扱われる *explode* と *explosion* の間に見られるような文法範疇の違いについては、RCG の枠組みにおいても次節でふれる

information packaging の違いとして無視されることなく然るべき地位を与えられていることがあるように思われる。しかし RCG における information packaging の位置づけは、実際には CG における construal のそれと同一ではない。次節では主にその点について見ていく。

3. 構文の意味面について

3.1. construal と information packaging

前節では、CG において意味と対になる形式として設定されるのは音韻構造であり、それが現実の言語使用から引き出すことのできるものだけを文法記述に用いるものとして認めるという制約を自らに課しているためであることを見た。そうした態度は、独立の根拠によってその存在が認められる基本的な認知過程以外に依存しない枠組みを目指す CG にとって重要なことであり、Langacker (2005) 自身その点に特に注意を引いて論じていることはすでに見たとおりである。これに対して、構文において形式と対になる意味については、CG と RCG とでこれまで特に明示的に対照させて論じられることはなかったように思われる。Croft はその著作の中で一部の用語法も含めて肯定的に CG に言及することがあるため、CG の construal と RCG の information packaging という、両理論にとって重要な概念についても実質的な差がないような予想を促される。実際、以下の引用の最後の部分では、Croft 自身が information packaging は CG では construal と呼ばれると言っている。

[G]rammatical structure does not “directly” express meaning in the sense of “who did what to whom, where, and when.” Instead, grammatical structure—grammatical constructions—represents a way of **packaging** and **manipulating** that information, as described at the end of § 1.3. The packaging of information is itself rich and multilayered, and pervades every aspect of linguistic expression from lexicon to grammatical inflections to prosody. It is also called **construal** in cognitive linguistic analysis (Langacker 1987, 2008; Croft and Cruse 2004, ch. 3). (Croft 2015: 13)

次のような言葉も、RCG の package が CG の用語法の construe に対応し、(semantic) information が CG の conceptual content に対応するように思わせるものである。

The function of any construction in a language is to package certain (semantic) information in a certain way, for the purposes of the discourse at that point. (Croft 2015: 17)

しかしながら、具体的な例への適用の仕方を見ると、RCG の information packaging を CG の construal と同じと考えるべきではないように思われる。次節以降では construal と information packaging の違い、およびその背景について述べる。

3.2. construal/information packaging と意味

Croft (2015) は、information packaging について次のように述べている。

In most syntactic constructions, the information packaging is globally organized around the following skeletal structure:

reference - what the speaker is talking about

predication - what the speaker is asserting about the referents in a particular utterance

modification - additional information added about the referent” (Croft 2015: 13)

・ *First principle of information packaging/construal*: any concept may be packaged, or more generally construed, in any way, in order to serve the joint goals of the interlocutors in discourse.

(This is actually a very general principle, but here we are concerned only with the packaging into reference, predication and modification.) (Croft 2015: 14)

その上で、例示として、次のような文を挙げている。

For example, we can refer to actions (8b)[*sic*] and properties (8c)[*sic*] as well as objects (8a) :

(8) a. Vanessa surprises me.

b. Vanessa's goodness surprises me.

c. Vanessa's resignation surprised me. (Croft 2015: 14)

つまり、semantic class としては object である Vanessa だけではなく、property に属する 'good' や action の一種である 'to resign' を指示表現として package することが可能、というわけである。ここで問題になるのは、ここで言われる information packaging が、ここでも両者の同一性を言うかのように “information packaging/construal” と書かれているとおりに、CG の construal に対応するものなのか、である。

CG においては動詞の *resign* とそれを名詞化した *resignation* とは、conceptual content は同じでも construal が異なり、その違いが動詞と名詞の違いに対応するとされる。information packaging については、その違いがどのような違いに対応するのかについてはここでは何も明示的には述べられていないが、上の例で言えば、property を表すものや action を表すものが reference を表すように用いられるということを CG の動詞 / 名詞の意味分析と整合するように解釈することはできるだろうから、その限りで construal と information packaging に違いはないと考えることは可能と思われる。

しかし、他の例を見ると、同じと考えることには問題がありそうである。両者の違いの一つの表れとして、CG では RCG の information packaging によっては区別されないものの間にも意味の違いを認めるといふ、言わばきめの細かさの違いがある。例えば、Croft (2015) は、異なる言語間あるいは単一言語内の、機能的には等価 (equivalent in function) な異なる構文の区別について論じる際に、単一言語内に機能的に等価な構文が複数ある例として次の英語の 3 つの object modification 構文を取り上げている。

(11) a. the regulations of the university

b. the university's regulations

c. university regulations

(Croft 2015: 18)

この3つは、ontology type (semantic class) としては object を表す *university* が modification に用いられて (modification construction に package されて) いるという点で同じで、semantic class と information packaging の点からは区別をされない。表現様式がさらに大きく異なる場合には、information packaging を補うべく、また別の概念が導入される。

English *I am not a doctor* and the Spanish translation equivalent *Yo no soy médico* are structurally similar in that they both contain an inflecting form (English *am*, Spanish *soy*) distinct from the object concept word (English *doctor*, Spanish *médico*). English and Spanish differ from the Classical Nahuatl translation equivalent *ah-ni-tīcītl*, in which the object concept word (*tīcītl*) itself is the inflecting form. Thus, we need grammatical comparative concepts that describe constructions that are equivalent in function but also similar in form, and contrast with other constructions that are equivalent in function but different significantly in form. The term we will use is one long used in typology (at least as far back as Keenan and Comrie 1977 and Givón 1979), namely **strategy**:

strategy: a construction in a language (or any language), used to express a particular combination of semantic structure and information packaging function, that is further distinguished by certain characteristics of grammatical form that can be defined in a crosslinguistically consistent fashion. (Croft 2015: 19)

ここで導入している“strategy”なしでは、object concept を表す語自体が屈折変化をする Classical Nahuatl の構文と、名詞＋屈折変化をする繫辞というパターンの英語やスペイン語の構文は、いずれも object を表す語を predication に用いている object predication 構文であるという点で変わらないため、information packaging の点からはそこに違いを見出すことができないわけだが、用いられる strategy による区別もあくまで表現様式の上でのもので、機能的等価性には関係しないものであることにも注意するべきであろう。これに対して Langacker (1995) は、上に引用した Croft が挙げている英語の (11a, b) の *-s* と *of*-genitive についても、両者を参照点機能を持つものとして分析するだけでなく、後者のその機能を *of* が本来表す *intrinsic relationship* から導いており、両者の間に細かな意味の違いを認めている。

3.3. comparative concept としての構文

RCG の information packaging が現象記述の上で CG の construal よりかなりきめの粗いものであることは、ある意味でそれが担うよう意図されている役割の必然とも言える。上に引用した Croft (2015: 19) からもうかがえるように、RCG の主な関心は通言語的に適用可能な枠組みを得ることにあり、そのために用いられる様々な道具立てや概念の多くは通言語的な比較対象を可能にする“comparative concept”を念頭に置いて設定されるものである。comparative concept について Haspelmath (2010) は次のように言っている。

Comparative concepts are concepts created by comparative linguists for the specific purpose of crosslinguistic comparison. Unlike descriptive categories, they are not part of particular language systems and are not needed by descriptive linguists or by speakers. They are not psychologically real, and they cannot be right or wrong. They can only be more or less well suited to the task of permitting crosslinguistic comparison. (Haspelmath 2010: 664-666)

さらに連鎖動詞構文の通言語的に妥当な規定のあり方との関係で次のようにも言っている。

[G]rammatical phenomena are not natural kinds. Our innate cognitive code for grammar (“universal grammar”) puts few restrictions on the kinds of systems we can acquire, and diachronic adaptation allows many different patterns to survive. [...] Comparative concepts are not DISCOVERED in the way natural phenomena are discovered, but are DEFINED by comparative linguists in order to allow comparison of languages. (Haspelmath 2016: 293)

The serial verb construction is quite unlike the natural kind *Vulpes vulpes* (the red fox), which is both applicable cross-continentially and a precise characterization of a particular specimen that I might find in my garden. The comparative concept of serial verb construction that I presented in § 2 is more like behavioural or ecological categories such as “predator” or “migratory animal”. These are not concepts for entities that are found in nature as such, but concepts specifically created by scientists who adopt a particular comparative perspective on nature. (Haspelmath 2016: 312)

3.4. 通言語的対照と information packaging

CG の construal⁵ は、同一の対象に対して様々な仕方で行われる異なる認知のあり方全般を指し、言語に反映する意味の違いを適切に記述し分けることを可能にするものとして、独立の根拠によってその存在を認めうる認知過程から引き出されるものであり、Haspelmath の言い方に照らして言えば、個別言語に実在する descriptive categories を捉えるものではあるが、人間に共通の基本的な認知能力に根ざすものとして通言語的な適用可能性・有効性のあるものとして想定されている。

これに対して comparative concept としての構文を規定するために用いられる information packaging は、個別言語の descriptive categories に対応するような心理的実在性とは独立に、通言語的に比較可能な構文を取り出すための、多様な言語に広く適用可能な、表現様式の観点からの一般性の高い切り口を提供するものである。construal という分析概念を用いる CG が動詞 / 名詞や主語の意味の規定といった抽象度の高いものに限らず、個別言語の個別構文の詳細な意味分析を行うことが多いのとは違って、RCG において一般的にそうした詳細な意味分析が行われることがない⁶ のも、こうした違いの反映と思われる。

3.5. translation equivalent と package 対象

通言語的な比較対象という観点から導入される information packaging のこのような役割のた

め、それで扱われる対象となるのは、個別言語 / 文化固有の様々な idiosyncratic な construal が encode されることが多い語彙 (lexicon) レベルではなく、主に morphosyntax レベルのものになる。

The range of constructions found in the world's languages represents the range of meanings that are communicated in linguistic utterances. Human languages are general-purpose communication systems and thus are used to express everything from fundamental experiences common to all human beings to highly specialized knowledge found only in a single culture or even more narrowly to a subcommunity in a culture with a particular expertise. No single grammar textbook or reference grammar of a language can possibly capture this full range of human experience even for one speech community. Nevertheless, focusing on the morphosyntax (rather than the lexicon) does delimit a more manageable subset of the grammatical structure of a language, namely how the meanings found in individual words and morphemes are combined and packaged. (Croft 2015: 18-19)

要素の複合の仕方に関わる morphosyntax レベルであれば、semantic class + packaging + strategy で扱えるという見通しである。

しかし、morphosyntax レベルであってもそのような形で扱えない場合もある。というのも、すでに見た英語の *I am not a doctor* (あるいはそのスペイン語の translation equivalent) と Classical Nahuatl のように大きく表現様式が異なるものであっても、対象のどこを直接の表現対象として選び出しているかという点では同じであるのに対して、言語の多様性はそれに限られないからである。

[T]wo languages often express precisely the same situation in very different ways. Recall, for example, Whorfs comparison of English *I cleaned it with a ramrod* and the Shawnee equivalent, whose lexical elements he identified as meaning 'dry space', 'interior of hole', and 'by motion of an instrument' (1956: 208). Or compare the Cora expressions in (13) with their English translations:

- (13) (a) *u-ká-kun* (inside-down-hollows) 'there is a small, deep well there.'
 (b) *a-ty'á-kun* (outside-in:middle-hollows) 'There is a wide-mouthed well there.'

Whereas English uses the noun *well*, which saliently evokes the functional notion of providing a source of water, Cora employs the subjectless verb *kun*, '(be) hollow/hollowness occur', which does not specifically pertain to wells or water, and emphasizes spatial configuration by means of verbal prefixes. Thus *ka-* in (13)(a) reflects the downward extension of the hollowness, while *u-* indicates restrictiveness (of the opening), depth of penetration, and inaccessibility (of the interior) to view. By contrast (a contrast easily ignored in English), the *ty'á-* in (13)(b) highlights the well's location in the middle of an extended area (surface of the earth), while *a-* conveys expansiveness, shallowness of penetration, and accessibility to view (Casad and Langacker 1985). (Langacker 1993: 460)

ここで言及されている Shawnee や Cora の例は morphosyntax レベルのものだが、これらの例は何

に着目して言語化するか自体が対応する英語とは大きく異なるので、用いられる strategy の点で対立するものとして Classical Nahuatl と英語 / スペイン語の predicate nominal construction を並べて比較対照できたのとは違って、英語の例と比較対照することはできない。

3.6. onomasiological アプローチと意味の複層性

言語間の形式面での多様性のため、類型論研究において通言語的な比較を行う際、対象となるものの同定は通常意味によらざるをえない。semantic class + information packaging + strategy という道具立ては、この類型論研究に一般的な、所与のものとしての意味にどのような形式が与えられるかを問う onomasiological なアプローチを前提として、言語化の対象とされて切り出された表現内容が言わば「どのような袋詰めの仕方をされているのか」、「どのような袋詰めの仕方が一般的か」を問うのに用いられるものであり、同じ事象を異なる側面から捉えるような場合はその適用の想定外となる。これに対して CG では、上でふれた Shawnee や Cora と英語の対応する文の場合のように関与する construal が大きく異なる場合でも、そこに共通するものは当該の状況を含めて豊かなものでありうる。

Remarkable, first, is the extent to which an expression's meaning depends on factors other than the situation described. On the one hand, it presupposes an elaborate **conceptual substrate**, including such matters as background knowledge and apprehension of the physical, social, and linguistic context. On the other hand, an expression imposes a particular **construal**, reflecting just one of the countless ways of conceiving and portraying the situation in question. (Langacker 2008: 4)

conceptual substrate の重要性は意味現象一般に見られることであり、ある意味がその意味として意味をなすことが可能になるのはそれが特定の役割を果たすより大きな概念的背景があつてこそであることは、「斜辺」がそれを含む直角三角形なしではただの直線に過ぎないというようなよく引かれる単純な例からも了解されるだろう。

これに対して onomasiological なアプローチで構文同定の際に着目されるのは、CG で言えば特定の仕方で construe された conceptual content から construe された結果として表れる、言わば表面の型だけを写し取ったような、表層的で単層的な意味機能であり、それ自体は分析対象にならないのに対して、物理的なモノやコトの場合と同様、抽象的な概念にも construal は関与しうるので、CG においてはそれ自体が分析対象になりうる。

例えば、RCG においても重要な役割を果たす conceptual space を用いて分析されるものの一つにモダリティ表現があるが、そうした分析で通言語的適用可能性のあるものとして設定されるモダリティ概念を個別言語のモダリティ形式が表す道筋は一通りとは限らない。Langacker (1991) は、英語の助動動詞が本来表していた力動的 (force-dynamic) な意味に Dynamic Evolutionary Model と CG で呼ばれる事実性についての理想化認知モデルが適用されることでどのようにしてそれが表すモダリティ的意味や時制的意味が生じるのかを論じているが、これは通言語的に適用可能なものとして設定される、結果として表されるモダリティ概念や時制概念が個別言語においてどのような construal を経て表現されているのかを問うべきこととする認識の表れである。

無論、モダリティ表現の成立に至るまでの文法化の経路の一つを記述したのとしてそうした意味分析を位置づけることはできるが“...a list of grammatical behaviors is merely that: a list of grammatical behaviors. In and of itself, it offers no unifying principle or even any rationale for there being such a list.” (Langacker 2008: 364) と考える CG においては、観察されるパターンがそもそもなぜそのようなものとして存在するのかを認知のあり方に引きつけた形で明らかにすることが重要なものとなる。⁷

DeLancey (1990) は、Lhasa Tibetan のある種の動詞語尾に見られる、アスペクト、証拠性、意図性という互いに独立の意味範疇を必要とするように思われる現象が、実は事象構造についてのある種の理想化認知モデルに基づく証拠性をめぐる現象として統一的に理解できることを示しているが、そのような分析は結果として表される意味の複層性に注目することで初めて可能になるものであろう。

そうした観点の重要性は、通言語的な比較の基準としてどんな意味機能を設定したら良いのか自体がはっきりしないような場合にはより明らかになる。それが何を表すのか、どんな conceptual-semantic concept を設定したら良いのかが分かりやすいモダリティ表現や空間表現とは異なって、例えばヴォイス構文の場合には、それが何を表し、どのような観点からそれを規定したら良いのか自体がはっきりしない。Croft (2001: Chapter 8) では、A 役割を担う項と P 役割を担う項のトピック性 (topicality) を軸として構成されるヴォイスの conceptual space 上に様々な言語のヴォイス構文を位置づけて比較対照する分析が示されているが、ヴォイスを捉える上でのトピック性の有効性は必ずしも自明なものではない。そのことは、例えば日本語の固有の受身（いわゆる「二受身」）においては、談話におけるトピック性が高くても無生物は基本的に主語になれないことからだけでも明らかだろう。さらに言えば、日本語の二項述語文において無生物が主語になりづらいのは受身文に限ったことではなく、英語の他動詞文にしばしば見られる、因果性に基づいて無生物が他動詞文の主語になるようなことは日本語では基本的にはできないが、このことは、日本語においては受動文も含めて一般的に節構成において主要な働きをするのがトピック性ではないことを示すとともに、ある特定の表層機能に着目することは、その観点から通言語的な比較の対象を取り出すことを可能にする一方で、その観点からは視野に入らない重要な部分を切り落とすことになる危険性があることも示唆しているように思われる。

通言語的な比較対照に用いられる comparative concept としてどのようなものを設定するかは研究者の恣意的な思弁によるわけではなく、幅広い言語を対象とした調査研究によって経験的に決められるものであり、それが様々な形の恩恵を言語研究にもたらすことに疑いはないが、普遍的な conceptual space による分析が分かりやすい形で成果を上げているのが空間表現やモダリティ表現などを対象にする場合が多いことを見ると、comparative concept レベルでの記述については、その有効性の程度と範囲を見極める必要があり、information packaging についても、それが担う役割の CG の construal との違いを認識し分ける必要があるだろう。

4. 結語

本稿の後半では、RCG の information packaging は、Croft 自身によって CG の construal と交換

可能な概念であるような印象を与える扱いをされることがあっても、少なくともそれが comparative concept としての構文を規定するものである限りは、CG の construal とはかなり性質が異なるものであることを見た。その違いは、つまるところは、認知が言語において果たす役割の重要性の見積もりの違いによるように思われる。分布に基づく分析法を採る Croft も、分布のあり方を定義する上で参照する conceptual space などの構造自体は認知機構の反映と考えていると思われるが、上に引用した “Our innate cognitive code for grammar (“universal grammar”) puts few restrictions on the kinds of systems we can acquire” という Haspelmath (2016) の言葉には、言語はその表面に表れる現象面がすべてという、ある種唯名論的な割り切った考え方が感じられる。それに対して、主体の能動的な認知の重要な部分を構成する construal に CG が大きな役割を認めるのは、認知という、広義の意味づけ作用こそ言語の本質であって、認知能力・認知機構に照らして見ることによって多様な現象を統一的に捉える可能性が開かれるとする、Cognitive Grammar という名称自体に表明されている CG の強い cognitive commitment の表れであり、alternate construal という複視点的認知を他者の視点を理解する心の理論 (theory of mind) を持つ人間独自の認知特性の表れ⁸として了解することを可能にする見方でもあろう。

CG の construal に当たるものが RCG において CG におけるのと同じような大きな役割を果たすものとして設定されないことには、本稿では扱えなかったまた別の理由があるように思われる。RCG には、通言語的妥当性に対する志向性に加えて、互いに相手の心を読めない者同士の共同行為 (joint action) のための協調装置 (coordination device) の一種として言語をその社会的側面から捉える視点と、そのような言語使用者の相互作用の結果として絶えず生じる言語の変化を生物の進化から思想概念の発展まで一般化して捉えようとする包括的な視点があり、そうした点も RCG に重要な形で反映していると思われるのだが、それについてはまた稿を改めて論じたい。

注

- 1) 本稿でしばしば言及する Croft (2015) は、“DRAFT OF AUGUST 2015: some sections are fully written out and others are in the form of a detailed outline with examples. Other sections are not yet written at all. Please do not circulate this draft.” という但し書きが付いているものであり、本稿で RCG について行う検討は Croft (2015) がそのようなものとして書かれたものであることを了解した上での暫定的なものである。
- 2) それにもかかわらず Croft (2001: 6) では RCG は CG の Content Requirement に従うと明記されている。冒頭に引用した Langacker の「disagreement ではなく non-agreement」というのは、こうした点を指していると思われる。
- 3) 例えば Langacker (1999) の ‘focus chain’。
- 4) 紙幅の都合上、主要な文法範疇や文法関係に対する CG の分析の具体的な内容については、Langacker (2015a) およびそこで言及されている関連する文献を参照されたい。
- 5) CG の construal の具体的な内容については Langacker (2015b) 参照。
- 6) “I assume only that a semantic structure is made up of components and relations among those components [...], and that morphosyntactic elements can denote (symbolize) either semantic components or semantic relations. Hence, the semantic representations in Part II merely indicate semantic components and their relations. Proposing and defending more precise semantic representations would require another volume.” (Croft 2001: 62)
- 7) conceptual space 上の特定の領域が各品詞のプロトタイプになる理由として、object と reference・action と predication・property と modification という semantic class と propositional act function の組み合わせの

トークン頻度の高さを挙げながらも、その組み合わせのトークン頻度の高さの理由自体にはふれない RCG (Croft 2001: 103-104) に対して、名詞と動詞の schematic な規定をもっとも自然な形で認知的な負荷が少なく満たすのがそれぞれ具象物と活動事象であることを言う CG (Langacker 2008: § 4.2)、という対比にも、観察される分布で語る RCG と関与する認知過程に目を向ける CG という両者の一般的な違いが表れている。

8) Tomasello (2003) 参照。

参考文献

- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William. 2015 revised draft. *Morphosyntax: Constructions of the World's Languages*. "Chapter 1: Grammatical categories, semantic classes and information packaging."
- Croft, William and Allan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, Scott. 1990. "Ergativity and the cognitive model of event structure in Lhasa Tibetan." *Cognitive Linguistics* 1: 289-321.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adele. 2006. *Constructions at Work. The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, Martin. 2010. "Comparative concepts and descriptive categories in cross-linguistic studies." *Language* 86: 663-687.
- Haspelmath, Martin. 2016. "The serial verb construction: Comparative concept and cross-linguistic generalizations." *Language and Linguistics* 17: 291-319.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2, *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Universals of construal." *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 19: 447-463.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Possession and possessive constructions." J.R. Taylor and R.E. MacLaury (eds.), *Language and the Cognitive Construal of the World*, 51-79. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1999. "Dynamic conceptualization." *Grammar and Conceptualization*. Chapter 12, 360-376. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2005. "Construction Grammars; cognitive, radical, and less so." Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel(eds.), *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*, 101-159. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2015a. "On grammatical categories." *Journal of Cognitive Linguistics* 1: 44-79.
- Langacker, Ronald W. 2015b. "Construal." Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak(eds.), *Handbook of Cognitive Linguistics*, 120-143. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.
- Tomasello, Michael. 2003. "The key is social cognition." Dedre Genter and Susan Goldin-Meadow(eds.), *Language in Mind: Advances in the Study of Language and Thought*, 47-57. Cambridge, Mass.: MIT Press.